

1. はじめに

近年の日本サッカーの躍進は戦術による要因が大きいと考えられる。本研究では、ディフェンス戦術に重点を置き、ボールとディフェンスの最終ラインから、効果的な最終ラインの位置を考察する。

2. データと測定方法

“日本代表に学ぶサッカーの技術と戦術” [1] 中のフォーメーション分析データを用い、ボールと最終ラインとの距離を1秒間隔で計測する。

データの収集は攻撃時と防御時に分けて行う。これは、攻撃時と防御時ではディフェンダーの役割が違ふことによる。ディフェンスは自チームがボールに触った所からカウントし、ディフェンスは相手チームがボールに触った所からと定義する。

最終ラインとは、ゴールキーパーを省く10人の中で一番後ろにポジションをとる選手の延長線である。図1に最終ラインの例を示す。図は日本が左方向へ攻めている状況である。日本の5番の選手が最終ライン、ボールの位置から矢印で示した距離を計測する。



図1. 計測位置

3. 統計的概容の結果

以下に2002年5月14日(ノルウェー)で行われた、ノルウェー対日本の国際親善試合中の、日本代表の最終ラインとボールとの距離の計測結果を示す。

この試合日本代表のフォーメーションは3バック、すなわちDFが3人横に並んで守備をするフォーメーションを採用していた。前半は両者無得点であったが、後半は相手のプレッシャーから最終ラインでボールを廻すことが増え、後退する展開が最後まで続き、最終的に3点を奪われ大敗した。

図2に攻撃時における距離の分布、図3に防御時における距離の分布を示す。図2を見ると攻撃時では主に、10m~20mの間に集中しているが、図3は主に、5m~15mの間に集中している。

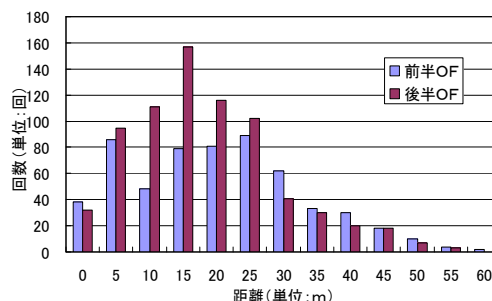


図2. 攻撃時の結果

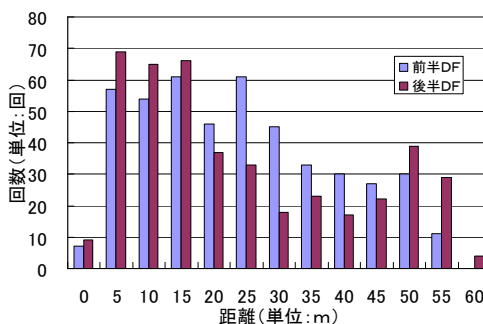


図3. 防御時の結果

表1に平均と標準偏差を示す。防御時、前半と後半の平均は殆ど同じであるが、攻撃時は2m程度の違いがある。これは攻撃時ディフェンダーがハーフラインから前にはあまり行かず、必ず1人は相手のカウンター攻撃に備えて残っていたためと考えられる。前半において2m距離が長いことから、チームが敵陣の前方でボールを持っていることが多かったと推測される。後半戦に3失点している事実と数値的な一致を見せている。

標準偏差は、後半に値が大きくなっている。ラインが激しく動き、後半は自陣深くまで攻められる展開が多かったためと思われる。

表1. 平均と標準偏差

	前半DF	後半DF	前半OF	後半OF
平均	22.512	22.373	17.902	16.026
標準偏差	14.679	17.348	14.486	11.885

4. おわりに

本研究では、日本代表の最終ラインとボールの距離について考察した。本研究における問題点はデータ数が1試合と少ないことである。サンプル数を増やして、他の試合と比較することが必要である。

参考文献

- [1] 財団法人日本サッカー協会(監): 日本代表にサッカーの技術と戦術, 株式会社ラティオインターナショナル, 2003.